■日　時：２０１９年７月１４日（日）

■場　所：立川教会

■説教題：「聖霊は全ての人に、分け隔てなく降る」

■聖　書：新約 使徒言行録11：1－18（p234）

■讃美歌：175「わが心は」460「やさしき道しるべの」

お早うございます。

どんよりとした日々が続きます。

でも、もう少しで梅雨が明けます。

梅雨が明け、照りつける太陽の日々が訪れると、又あの冬の厳しい寒さを懐かしく思うのでしょうか？

今日与えられた聖書の御言葉は、使徒言行録11章1節から18節です。

先週学んだ箇所に続き、使徒言行録のこの箇所は、福音が異邦人にもぐんぐん宣べ伝えられている様を記しています。先週は、使徒フィリポが、異教徒であるエチオピアの宦官にイザヤ書の教えを解き明かし、洗礼を授けました。そして、今日のこの箇所は、使徒の中の使徒、大使徒とまで呼ばれるペトロが、同じく異邦人である「イタリア隊」と呼ばれる部隊の百人隊長コルネリウスにカイサリアで洗礼を授けるのです。

しかし、異邦人に洗礼を授けることは、大きな問題でした。

人間的な思いの中では、全く不可能なことでした。

初代教会の拠点であるエルサレム教会にいる者たちにとって、異邦人に洗礼を授けることも勿論ですが、それ以上に、ユダヤ教の戒律を破り、異邦人と共に食事をすることが理解出来なかったのです。そんな事をすれば、ユダヤ教では、自分自身も汚れてしまうと信じていたからです。

ユダヤ教徒からキリスト教徒になることは、生易しいことではありません。

それは、生まれた時からユダヤ教の社会で育って来た者にとって、自分の人生が180度変わることを意味しているのです。

ユダヤ教には厳しい掟がありました。

特に旧約のレビ記に規定されている一つひとつの決まりは、その掟を遵守することによって、今日を生きる意味を覚えることが出来ました。その決まりのどれか一つを踏み外すことは、罪を犯したことであり、罪赦されるための犠牲の燔祭を神様に捧げなければならなかったのです。

その罪の中でも、最も重大な罪に数えられていたのが、異邦人との交わりです。異邦人との交わりは、いつしか異教の神礼拝、即ち偶像礼拝を生み、ヤハウエの神の厳しい審きに遭うと固く信じられていたためでした。それは、イスラエル滅亡の歴史と直結していました。

そのタブーを、こともあろうに、自分たちの指導者であるあのペトロが破り、異邦人と一緒に食事をしたのです。激しい動揺がエルサレムの他の使徒達を襲ったのは、想像に難くありません。一体、ペトロはどうしてしまったのか。疑心暗鬼の中で、2節から3節です。

２：ペトロがカイサリアからエルサレムに上って来たとき、割礼を受けている者たちは彼を非難して、

３：「あなたは割礼を受けていない者たちのところへ行き、一緒に食事をした」と言った。

割礼を受けている者とは、キリストの福音を受け入れつつも、未だユダヤ教の教えから抜け出すことの出来ない者たちでした。割礼を受けていない者とは、ユダヤ人以外の異邦人のことです。ペトロを非難した者、つまり、イエス・キリストの福音を信じ、受け入れながらも、今なおユダヤ教の慣習から抜け出すことの出来ない者たちは、異邦人との食事を禁じたユダヤ教の戒律を破ったとして、ペトロを厳しく咎めたのです。

しかし、この非難の嵐の中で、ペトロの対応は見事でした。

見事と言うより、この4節から始まるペトロの弁明は、何か確信に満ちていることを感じさせるのです。それは、「信仰の弱い者には、弱い者のようになった」と言う使徒パウロの言葉を彷彿させる弁明でした。

4節です。

４：そこで、ペトロは事の次第を順序正しく説明し始めた。

5節以下では、ペトロがヤッファの町で実際に経験した話しから始まります。

彼は幻を見ます。5節から10節です。

５：「わたしがヤッファの町にいて祈っていると、我を忘れたようになって幻を見ました。大きな布のような入れ物が、四隅でつるされて、天からわたしのところまで下りて来たのです。

６：その中をよく見ると、地上の獣、野獣、這うもの、空の鳥などが入っていました。

７：そして、『ペトロよ、身を起こし、屠って食べなさい』と言う声を聞きました。

８：わたしは言いました。『主よ、とんでもないことです。清くない物、汚れた物は口にしたことがありません。』

９：すると、『神が清めた物を、清くないなどと、あなたは言ってはならない』と、再び天から声が返って来ました。

１０：こういうことが三度あって、また全部の物が天に引き上げられてしまいました。

この幻が何を意味していたのかは明らかです。

ユダヤ教の戒律に、神様が介入したのです。

ユダヤ教徒にとって、日々食する食物の規定は、重大でした。

それは、私たちには理解出来ないと思います。

“汚れ”と言う感覚が無いからです。

現在でもイスラム教徒は決して豚肉を食べませんし、ヒンドゥー教徒は牛肉を食べません。それを食べてしまうと“汚れ”てしまうからです。

一旦“汚れ”た身体をもう一度清くするためには、どれほどの困難な所業が求められるのか、私には分かりません。いや、もう一度清く出来るのかすら分かりません。この事は、単に体が“汚れる”以上に、精神的なストレスを起します。心が病んでしまうのです。

その事を十分に分かった上で、ペトロの弁明が行なわれているのです。

ペトロは続けます。11節から14節です。

１１：そのとき、カイサリアからわたしのところに差し向けられた3人の人が、わたしたちの家に到着しました。

１２：すると“霊”がわたしに、『ためらわないで一緒に行きなさい』と言われました。ここにいる6人の兄弟も一緒に来て、わたしたちはその人の家に入ったのです。

１３：彼は、自分の家に天使が立っているのを見たこと、また、その天使が、こう告げたことを話してくれました。『ヤッファに人を送って、ペトロと呼ばれるシモンを招きなさい。

１４：あなたと家族の者すべてを救う言葉をあなたに話してくれる。』

ここでの重要な聖句は、12節です。

「すると“霊”がわたしに、『ためらわないで一緒に行きなさい』と言われました。」

8節の「神が浄めた物を、清くないなどと言ってはならない」の御言葉に呼応する言葉です。

再び神の介入です。

ユダヤ教の掟に縛り付けられていた彼／彼女を、その掟から解放するには神の介入が必要でした。そして、その介入を最後に確認する出来事が起こります。それは、あの日、自分たちに起きたと同じことが、今、目の前で、異邦人にも起きていることの確認でした。

まさに、今、カイサリアのヤッファでのコルネリウスの家でペトロが経験しているこの事は、神様が成されている神の業であることをペトロは知ったのです。神様の業であると知った以上、どうしてそれを妨げることが出来るでしょうかとの弁明でした。

15節から18節です。

１５：わたしが話しだすと、聖霊が最初わたしたちの上に降ったように、彼らの上にも降ったのです。

１６：そのとき、わたしは、『ヨハネは水で洗礼を授けたが、あなたがたは聖霊によって洗礼を受ける』と言っておられた主の言葉を思い出しました。

１７：こうして、主イエス・キリストを信じるようになったわたしたちに与えてくださったのと同じ賜物を、神が彼らにもお与えになったのなら、わたしのような者が、神がそうなさるのをどうして妨げることが出来るでしょうか。」

１８：この言葉を聞いて人々は静まり、「それでは、神は異邦人をも悔い改めさせ、命を与えてくださったのだ」と言って、神を賛美した。

私は、このペトロの弁明を読み、初代教会において福音がユダヤ人から異邦人にまで宣べ伝えられて行く様を、鮮やかに知ることが出来たように思います。

慣習の持つ力を知っています。

それが宗教的であればあるほど、その人の生活を規制し、さらには精神生活にまで影響を及ぼします。その中でもユダヤ教の教え、戒律、掟ほど厳格なものはありませんでした。それを、人間の意思の力で打ち破ることは、まず不可能です。

だからこそ、聖霊が降り、聖霊が導く、即ち神様の介入が行われたのです。

ペトロが見たのは、あのペンテコステの日に自分たちが経験したのと同じ聖霊が、あの異邦人にも降った事実でした。その瞬間、異邦人は、ペトロにとって神の国を受け継ぐ同じ神の民となります。誰が何と言おうと、この耳で聴き、この目で見た事実です。福音は全世界の民へ届けられることを確信したのです。そして、それは同時に、ペトロにとってユダヤ民族に対する選民思想からの解放でした。

日曜日、私たちは教会に集います。

聖書を読み、讃美歌を歌い、メッセージを聞き、食卓を囲みます。

皆で献金をして、この教会を支えます。

私たちの教会であり、そこで営まれる私たちの働きであり、交わりです。

何の目的もなく、ただ集まっているのではありません。

主イエス・キリストの十字架と復活に、自分自身の生きる力と希望を見出し、伝道の業を共に担う同労者として神様に呼び集められています。

そして何よりも、それぞれが、これまで歩んで来た道に、神様の憐れみと導きを知らされ、慰めと励ましが与えられたことを知っている者たちです。

このような私たちに、さらになお神様から期待されている事があります。

期待されていると言うより、今日与えられた聖書の御言葉に従えば、命じられていることです。それは家族伝道です。

私には、現在妻と3人の息子とその連れ合い、又孫も3人います。

総勢11人の中で、信仰を持っているのは妻と私だけです。

息子たちは皆幼児洗礼を受けていますが、信仰告白、即ち堅信礼を受けていません。

孫の一人は、ようやくキリスト教系の幼稚園に通い始め、キリスト教に関わる者が一人増えました。皆さんと同じように、子どもたちの事はいつも祈りに覚えています。そうした中で、昨年9月に結婚した三男の妻の実家が洋食屋さんを営んでいて、その方が、この秋に一回、料理教室を担当して下さることになりました。その事が決まると、3男夫婦も料理教室に参加すると言うのです。子どもたち夫婦は、皆一度この教会に来たことがありますが、三男は夫婦として訪れるのは初めてです。まず礼拝にと思いますが、それでも、料理教室を行っている意味が、私の家族にまで直接及ぶとは思ってもいませんでした。

何がきっかけでも良い、家族伝道を始めよとの神様の促しを聞くのです。

祈りましょう。